フィールド・ノート

現代を生きるヤンバン（両班）
－韓国大邱でのフィールドワーク－

古川　宣子

ヤンバン（両班）という韓国語をご存知だろうか。近年の韓国料理ブームで、近くのごく普通のスーパーにも、韓国料理の食材などが並ぶ中で、韓国のり「ヤンバンキム」を買われた方もいるかもしれない。ちなみに韓国のりは、日本人が旅行などで韓国を訪れた際に、買って帰るポピュラーなお土産の一つである。ごま油と塩をまぶした海苔は香ばしく、そこには日本の海苔とは一味違う韓国料理の顔がある。

ここで海苔の一商品名として採用されている、両班という言葉は、「朝鮮の高麗時代や朝鮮王朝時代に官僚を出すことができた最上級身分の支配階級」（『朝鮮を知る辞典』）を意味する。イメージとしては日本における武士に相応する身分であるが、両班は官吏登用試験である科挙への合格がその前提となっており、その点では日本の武士とは大きな違いをもっている。また、現代の日本では「私の祖先は武士です」などということは、普通会話として話さないし、そもそも日本では何十代も前の祖先を知っていて、かつ祖先との関係で自分が何者であるかを意識する人はほとんどいないであろう。しかし、韓国では、近代に入り1894年に身分制は法的に否定され、両班という社会身分は制度的になくなったが、現在では両班意識は逆に一般の人々に拡散している。これは一説では両班の間で作成されていた、家系に関する記録である『族譜』の収録範囲が広がったためとされているが、自分の祖先は両班であると考えている人が少なくないのである。両班意識は現代韓国人の自己認識に大きな影響を与えているのである。例えば自分の祖先はどのような両班で、その祖先から数えて自分は何代目であり、立派な祖先をもつ自分を誇らしく思い、その「血脈」につながるものとして恥ずかしくない行いをしなければならないと考えるというような。そうした意識を背景として、同じ祖先から枝分かれしている多数の人々を一門として認識し、一門の始祖及びその後排出された社会的に顕著な活動をした者の祭祀を共同で行うという活動がされている。大邱のある慶向北道は特に多くの儒者を排出し、現在もそうした活動が韓国内で最も盛んな地域である。

ところで筆者は、フィールドワークとして、大邱市の月背地区に住み続けてきた両班家門の丹陽禹氏一族を2001年から調査している。調査のきっかけは、月背地区を対象として文化人類学・歴史学・地理学などを専門とする日韓の研究者が共同研究として、朝鮮王朝時代から現代にかけての同地区の変化を様々な面から考察しようというプロジェクトの一員になったことが始まりだった。もともと、朝鮮近代教育史を専門としている筆者は、従来は文献研究が主で、植民地期の政策研究と朝鮮の全域的な状況分析を行ってきた。ただし、こうしたマクロな視点からの接近とともに、一定の地域について、ミクロな視点から当時の状況を具体的かつ立体的に考察したいと常に考えてきた。以前、友人の故郷である全羅南道光州市の近くの村で、各学校に残る植民

地期の学籍簿を調査したことがあった。しかし、学籍簿を利用するには、その地域について様々な情報が無いと状況分析として生きてこないという限界があり、これについてはあまり分析を進めることが出来ずにいた。また、当時教育を受けた生徒や教師へのインタビュー調査も行ってきたが、インタビューから当時の教育状況分析をするにも、個々人についての情報を地域の全体的教育状況やあるいは生活空間の中に位置づける必要性があり、そうした調査を系統立ててする条件がなかなか整わなかった。

しかし今回は筆者個人の調査だけではなく、数百年にわたる長期的視野で複数の研究者と同一地域を調査することから、情報の交換などが可能であり、かつ４年にわたる調査であることから（現在３年目）、特定の地域を総合的に調査する条件が一定程度与えられている。これが、従来試みはしたがあまり進まなかった調査と大きく違う点である。現在私が取り組んでいるのは、この地区について植民地時代の様相を教育の面から考察することで、特にこの地区に数百年の間住んでいる、両班家門丹陽禹氏を中心としてその教育活動を調べている。

こうして、フィールドワークを始め、その後１年に１・２度は大邱を訪問し調査を進めている。ソウル・釜山に次ぐ韓国第３の都市大邱市は、四方を山に囲まれた盆地で、夏の酷暑は韓国内でも有名である。研究の初年度（2001年）私は、他の研究者との打ち合わせのため前期の授業が終わって間もない７月末に大邱に向かい、数日間フィールドワークを続けた後の８月初旬、突如急性大腸炎で入院するはめになった。２泊だったが生まれて初めての入院経験である。８月の第１週目は例年暑さがピークを迎える時期とされ、この頃に多くの会社員は夏の休暇をとる。医師の話では火を通していない食べ物にあたったのだろうということだったが、夏の暑さが一番厳しい時期に酷暑の大邱でフィールドワークを続けた疲れで私自身の体力が落ちたことが主な原因だろう。フィールドワークに出るたびに、フィールドワークに必要な「体力」を確保することがいかに大切かを感じている。年をとるごとにその感は強い。

また、2003年２月の調査では、日本でも連日報道された、大邱の地下鉄事故の現場駅からそれほど遠くない駅の近くに私が宿泊していたホテルがあり、その日も地下鉄に乗って市内方向に向かっていれば事故に巻き込まれないとも限らなかった。運良く、その日はインタビュー調査を行うため丹陽禹氏の歴史館に「タクシー」で行き、その後昼食をとった際、テレビ速報を見て唖然としたのだった。

ところで丹陽禹氏一族には、植民地時代の三・一独立運動（1919年）に関連する運動としてよく知られている巴里長書事件で、朝鮮独立を訴える文書に署名した儒者が５名おり、解放後、これらの人々は大統領から表彰も受けている。現在私は、当時月背地区に唯一あった植民地初等学校について、その沿革や学籍簿の調査などをすると共に、丹陽禹氏一族の植民地期の教育行動がどのようなものだったのかについて、特に独立運動をした人物などをキーパーソンとして選択し、子孫の教育がどのように展開されたのかなどを考察する作業を続けている。

私が入手した月背地区在住丹陽禹氏一族の族譜である『丹陽禹氏判書公派譜』の最新版は全２巻となっていて、上巻が516頁、下巻が710頁にもなる分厚い立派なものである。一族の始祖としては、高麗時代の「禹玄」という人物がなっており、６代目からはその生

年月日（1229年）が、８台目からは死亡の年（1262年）も記録されており、一番新しい世代としては32代目が記録されている。800年近く前まで遡り自分たちの共通の祖先を設定し、共通の始祖につながる者の集団として一族を形成している。自分がこうした一族の中に存在すると認識される際、最大の影響を与えるのはこうした『族譜』(家系に関する記録)であろう。

現在月背地区に住む丹陽禹氏一族は、『族譜』の刊行や、自分たち一族の祖先の祭祀を執り行うだけでなく、自分たちが従来住んでいた土地を公園として残し、また自分たちの歴史博物館まで建てて、自分たち一族の歴史を顕彰する努力を重ねている。同一の祖先を持つ集団が自らの家系について本を編纂(『族譜』）したり、その祖先を祭る祭祀を定期的に執り行うことは珍しくないが、公園をつくり、碑石をたて、ついには一族についての歴史を展示解説する博物館までつくる、その原動力や紐帯はどのような社会的背景から生じるのか。そこに、現代に生きる両班意識、つまり自らの一門が両班であることを強く意識しそれを維持・顕彰しようとする意識があるのは間違いない。また、こうした活動は経済的基盤が無いとできないわけで、両班意識は単に観念的なものとしてだけではなく、土地・建物・維持運営にかかる莫大な資金を一族全体で確保するといった、社会的な実体のあるものである。

日本と韓国は、中華文化圏に属し、仏教・儒教などが人々の精神生活の基盤となっている点や、気候が類似している点など、社会的・文化的に非常に類似していると言われている。世界的な規模でいえば、確かにそうだろうが、しかし、一見似ているが両国のあり方には非常に大きな違いがあるということも同時によく言われてきた。

一族の歴史の中に自分を位置づけ、一族として集団的な活動することが、どのような個人的意味・社会的な影響力があるのかなどは、旅行などで訪れるだけではなかなか気がつかない現代の韓国社会の特色だろう。フィールドワークでは、歴史的過去を対象として自らの研究課題に取り組むともに、韓国社会の今（歴史的現在）を体験できることも、大きな魅力であることを実感している。

丹陽禹氏一族が建てた「月谷歴史博物館」